

ネパール仏教の特徴と現状について

辻 井 清 吾

一 ネパールの歴史と仏教

1. 時代区分

ネパールは、経済・文化地域として、東部・中部・中西部・西部・極西部の五地域、また地形上の区分として、平野・丘陵・山岳の三地域に分かれ、首都カトマンズがあるカトマンズ盆地⁽¹⁾（以下、盆地と略す）は、地形的に丘陵地帯、文化的に中部地域にあり、ネパールの中心地域である。時代区分としては、古代期、中期、近世・現代期と変遷しており、古代からの独立国であり、かつ中国とインドの緩衝国であり、盆地内は早くから政治・文化・地理上、重要な役割を果している。詳細には以下のように区分される。

i) 古代期…リッチャヴィ(族) (Licchavi) 王朝⁽²⁾以前(五世紀以前)は盆地を中心に展開されているが、未詳の史実がいまだに多い。

ii) 史的古代期…リッチャヴィ王朝時代(五〜九世紀)で、盆地中心に統治した時代

iii) 中世期…リッチャヴィ王朝滅亡後で、前期(八七九〜一四、五世紀)、後期(二四、五世紀〜一七六九年)に二分され、

前期はデーヴァ王族、三大勢力分立時代（前期マツラ（族）⁽³⁾（Malla）朝、カサ王国、ティルフット王国）に細分される。

iv) 後期：小王国分立・分裂の時代に入り。盆地内はマツラ王朝の三都（カトマンズ（カンティプール）・バクタプル・パタン（ラリトプル））王国に、其の他は西部で二二諸国、中部で二四諸国の小王国時代になる。

v) 近世期：ゴルカ（Gorkha）王朝時代（一七六九～二〇〇八年）となり、一七六九年プリシユビナラヤン・シヤハ大王が全土を統一し、シヤハ（Shah）王朝となる。歴代のヒンズー教徒の国王はヴィシユヌ神の化身と言われ、憲法に明記されてきた。（一七六九～二〇〇八年）

vi) 現在：王国から共和制時代へ（二〇〇八年～現在）⁽⁴⁾

二 ネパール仏教の現状

1. 概要

ネパール連邦民主共和国は一〇〇余に及ぶ多民族・多言語からなる共和制国家である。各民族は自ら固有の言語を母語にする。ネワール人はネワール語を母語として殆どは先住民として盆地内に居住し、ヒンズー教又は仏教を信仰している。現在、国内では次の四つの仏教が存在する。

- ① 盆地に古代から居住するネワール人により信仰されるネワール仏教
- ② 一九五九年のチベット政変以後、難民としてネパールに移住した、チベット人により信仰されるチベット仏教
- ③ ミヤンマー、スリランカの支援により、一九三〇年代に活動が開始され、近年活発なテラヴァータ仏教
- ④ チベット仏教の影響を受けた山岳地域に信仰される仏教

盆地内では、①、②、③の仏教が見られる。②のチベット仏教はボードナート、スワヤンブナートを中心にネワール仏教に見られない充実した僧団組織による宗教活動を行っており、寺院維持にも寄与（盆地郊外バルビンにあるヴァジュラ・ヨービーニー寺院はネワール寺院であるが、チベット人の補助を受けた）している。④については、盆地内では重要な位置を占めていない。現状からして、ネワール仏教は、日常生活に於ける儀礼、通過儀礼を通じて、盆地内を主とした伝統的役割は維持されている。ネワール仏教を広義にはネパール仏教とも称する。ネパールの宗教的な意義を考える場合に、非常に興味深い行事がある。盆地西方にあるパシユパティナート寺院（ヒンズー教の聖地）は、一年の内のある一日のみであるが、ご神体の本尊シヴァ・リング（リング Lingam・男根と、ヨニー Yoni・女陰の結合を子宮の側から見て造形化している）を交換する。本尊は仏の冠を被せられ、仏教徒の礼拝を受ける。これによってヒンズー教のシヴァ・リングの世界観（盆地全体がシヴァ神の妃である女神の子宮の内である事）は、最も直截的な方法で仏教の世界観（盆地という現実世界は壺の中（壺中人）であった）に逆転されてしまう。この不思議な伝統は、二つの世界観を表裏一体の関係に統合する。このような事柄はネパールでも他に例がない。ネパールの仏教は主に大乘仏教と真言密教（金剛乗）との混合である。

伝説によると、カトマンズの谷は昔大きな湖であったが、多くの仏がやってきて湖の中の蓮を運んで帰った。後に文殊が来て山を切り湖を埋め、またダルマカーラ菩薩がこれを干拓して現在のネパール谷にしたと伝えられる。ネパールでは「九つの教え (Nava Dharma)」が尊ばれている。

一 八千頌般若、二 華嚴經、入法界品、三 十地經、四 月燈三昧經、五 楞伽經、六 法華經、七 一切如来金剛三業最上秘密大教經、八 ラリタ・ヴィスタラ（方広大莊嚴經に近い）、九 金光明經、である。⁵⁾（史的変遷は別表六参照）

三 国勢調査統計から見た仏教系民族の推移（別表一～四）

二〇一一年国勢調査（十年毎に実施）によれば、ネパールの総人口は二六四九万五千人であり、宗教別人口分布は、ヒンズー教（Hindu）二二五五万二千人（八・三四％）、仏教（Buddhism）二二九万六千人（九・〇四％）、イスラム（Islam）一一六万二千人（四・三九％）、キリスト教（Christianity）三七万六千人（一・四二％）、その他一〇〇万九千人（三・八一％）に分類される。

仏教徒の地域分布は、東部四五万八千人、中部一四〇万九千人、西部四〇万三千人、中西部九万九千人、極西部二万七千人となる。

統計上、ネパール仏教は、ネワール族とチベット系少数民族を中心に、伝統的に信仰されている。ネワール族人口は一三二万二千人（男六四万二千人、女六八万人）（四・九九％）であるが、仏教徒とヒンズー教徒との判別基準には異論もあり、在家仏教徒数は実際には本統計数よりも多いと主張する関係者もあり、確定といえない面もある。過去の国勢調査（一九六一年～二〇〇一年）においても、中位カースト内の調査対象者は、以前に、ヒンズー教徒として登録を承認された人々でも、仏教徒であるとの自覚を次の国勢調査で主張した事実があった。近年、仏教徒よりも盆地内へ居住するイスラム教徒の増加が著しい。伝統的にインド国境沿いのルンビニー（Lumbini）（釈迦生誕地）地域はイスラム教徒が多いが、一九九〇年第一次民主化以降、盆地内にモスク建立があり、信者数の移動が目立つ。（一九八一年六五万三千人、二〇〇一年九五万四千人）その要因として、① イスラム教徒人口は、一九九一年調査より増加傾向にある、② チベット系少数民族は政府により人口増加を抑制され、地域に偏重がある、③ ネワール内の混合カーストはヒンズー教徒と登録され、④ パンチャヤット（Panchayat）時代（一九六〇

年二月～一九九〇年四月第一次民主化迄のマヘンドラ (Mahendra)・ビレントラ (Birendra) 二国王の絶対専制による無政党政治体制 (Panchayat) のヒンズー化政策により、チベット系のヒンズー教徒への転換があった、(憲法にて、国家はヒンズー教国家であると成文化) 等が示されている。

一九七二～二〇一一年国勢調査 (別表一) 推移を見ても、人口は急増しているが、仏教徒は一九八一～一九九一年に急増した。その主要因は民主化により、以前の王制時代において、チベット系民族間では、ヒンズー教徒としての登録者が、民主化以降、元の仏教徒に戻り、かつ、地方から盆地内に多くの移住者による、顕在化が示される。

四 ネワール族の仏教系カーストについて

1 宗教的見地からの区別

大別して僧侶カーストと在家仏教徒カーストに二分される。

i 僧侶カースト

僧侶カーストに属するのは、高位カーストであるヴァジラチャリヤ (Vajracharya) とシャキヤ (Sakya) 仏教僧侶、釈迦族の末裔と呼ばれる) の姓を名乗る人々のみであり、世襲制の司祭カーストである。彼らの殆どは盆地内に居住している。ヴァジラチャリヤのみ金剛阿闍梨の灌頂の儀式を受け、シャキヤと区別される。ヴァジラチャリヤは職業的司祭として各儀式を行う資格を得るがシャキヤは得られない。順位では、ヴァジラチャリヤが上位でシャキヤが次位にある。しかし、理念上 (または、実際の出家の儀礼でも)、ヴァジラチャリヤはシャキヤの段階 (すなわち仏陀釈尊の悟りの段階) を経た上で、儀礼執行者の地位に就く事になっている。

世俗の職業として、両者は金銀細工等の貴金属の手工・細工職人が多く、寺院内では共に居住し、協力して儀礼

を行う事が多い。ヴァジラチャリヤとシャキヤは「グテイ」(guthi)と呼ばれる組織に属する。「グテイ」とはサンスクリットの「会合、親族関係、連携」を意味する「ゴーシユレイ」からの派生語であり、僧侶及びネワール人全てが属する社会的慣習、宗教儀式、宗教的事物の様々な維持集団であり、例えば葬式のための共同扶助体としての機能、尊像、塔、堂を維持している。カーストは生まれにより規定されるが、グテイは原則的に各々の意志に従い、どこでも属する事が出来る。ヴァジラチャリヤとシャキヤは特定の寺院と連携のグテイに属し、寺院の維持、管理、毎日の儀礼(日常供養)、年中行事を輪番で行っている。他にカトマンズ市のみに、一八主要寺院のヴァジラチャリヤが所属する「アーチャルヤ・グテイ」がある。両者には通婚、共食の関係がある⁹⁾。

ii 在家カースト

在家カーストに属するのは、以下の五者である。① 商人カーストに属するカンサカール(ブロンズ細工職人)、タムラカールとタセット(銅細工職人)、トラダール(商人)、スタピット(木工職人)等の混成カースト。② 農民カーストに属するタンゴール、マハルジャン等の姓を名乗る人々で、ジャープの名でも知られる。彼等は往々にヒンズーの祭礼儀式にも参加し、国勢調査でヒンズーに分類されるがヴァジラチャリヤを招き儀式も行う。③ ヴィヤンジャンカール(野菜栽培)、カーピト(理髪業)等の姓を持つ人々。④ カドキ・カパーリ(肉屋、葬儀の際に楽器を演奏)⑤ デイヤラー、チャームカラ(共に清掃業)と呼ばれる最下層の人々。から成る。

通常、④、⑤の人々は仏教徒、ヒンズー教徒の区別が明確でなく、儀式の際、祭司に仏教僧、ヒンズーのバラモンを呼ぶかで区別されるといわれる¹⁰⁾。

2 文化的見地からの区別

盆地内のネワール族には多数のカーストが見られ、三〇余にも及ぶ。仏教司祭のカースト(ヴァジラチャリヤと

シヤキヤ)は存在するが、実際には司祭の仕事を行うカーストでも剃髪、出家せず、妻帯、飲酒、肉食(牛、豚を除く)が許され、司祭の役割はヒンズー儀礼と相似している。

経済的には、高位カースト層が経済、教育面で恵まれている傾向があり、その層の人々が有利な職業に従事し易い。社会・文化面では、その空間配置も特色を持つ。ヒンズー教の四ガネシユ、四ナラヤンと共に、自然成仏像といわれる四大観音(赤観音、白観音等)等が盆地内(カトマンズ・バタン・チョーバル・ナラに一観音ずつある)に配置され、集落内外に神仏を正しく位置させようとする意図が見られる。人々の居住空間は、カースト制度に基づいて配置されているのみならず、神仏の曼荼羅として聖化されており、その秘儀性、儀礼指向、集団性、重層した空間の創出はネパール社会の代表的特徴といえる。この自然成仏観音信仰はやがてチベットに伝わり、チベットで尊崇された幾つかの観音霊像には、バタンとカトマンズの観音と同本同柄であるという伝説が生まれた。我が国の長谷寺の十一面観音と同本同柄と伝えられる観音像が各地に伝来するのに比せられる。

五 儀礼について

1 概要

現代のネワール仏教は、従来から主に宗教学、文化人類学の学者から様々な様相、意味において、「儀礼仏教」と評価されている。その儀礼はヴァジラチャリヤのみで行われ、シヤキヤが僧侶カーストに所属しながら実際に、僧都としての存在意義を自覚するのは難しいと言える。シヤキヤは、僧侶としての誇りを、一九五一年王政復古で国内布教が許された南方系の「テラヴァーダ仏教」の僧侶となる事で、自らの僧としての誇りを回復しつつある傾向が見られる。「テラヴァーダ仏教」はネワール仏教の儀礼主義とは明確な一線を画し、その僧侶は厳格な戒

律を厳守し、仏になる為の修行に熱心である。

慣例として、ヴァジラチャリヤとシヤキヤの男子は四日間の僧院儀礼 (bare chuyegu) を担わねばならず、自らの所属は常に父親の所属寺院の一員となる故、自らの妻が下位カーストであるヴァジラチャリヤとシヤキヤの男子は寺院内ではなく、寺院の外で儀礼を行うとされる。彼らの主な義務は所属寺院の後見人としての実践であり、日常の儀礼実行と、諸仏・装飾類の維持に責任を負っている。

儀礼も通年反復儀礼、年中行事、人生儀礼、随時儀礼と区分できるが、一般に儀礼に費やされる時間、エネルギー、出費も非常に多く、かつ、社会内の集団性により、同職者、音楽・演劇の教習仲間、共同労働集団等が集まり、関係する神格の礼拝を行い、宴会を開く、という場面が大変多く展開される。

2 儀礼の種類

現在、行われている儀礼はおよそ、一〇〇から一三〇種類になるといわれる。その区別を概要すれば、

- ① シヤンティ・スヴァステイ儀礼…災難を除き、平和と幸福を願う。病気の平癒も祈願する。
- ② デイクシャ儀礼…カルト集団への入信儀礼。この場合、寺院内の秘密仏の霊場へ入る。この儀礼を受けた者には、本人のみの特権がある。
- ③ プラクティシユター儀礼…寺院・家・仏塔・仏像等の建立完成儀礼。
- ④ アンティエーシユティ儀礼・ピンダ…葬儀と死者の追善儀礼。
- ⑤ プラーヤスタ儀礼…懺悔減罪の儀礼。
- ⑥ ニティヤ・ブジャ儀礼…日々の勤行、月例と例年の行事となった儀礼を含む。
- ⑦ ヴァジラチャリヤ儀礼・タントラ…儀礼的な舞踊と宗教歌の吟詠を含む秘密の儀礼。

⑧ サンズカーラ儀礼…誕生から死に至る迄の通過儀礼¹⁾。

3 儀礼の構造

いずれも、儀礼の本尊を呼び招き、本尊の前で所期の目的となる個別の儀礼をはじめめる。一連の儀礼のメカニズムを理解する事が、ネパール仏教儀礼の基本を知る必須事項となる。

〈出家儀礼(バレ・チュエグ)と灌頂〉

出家は本来、個人の自由意思に基づく任意の宗教行為であるが、今日のネパール仏教では出家儀礼は、僧侶カーストの男子を対象にした慣習的な通過儀礼(サンズカーラ)の一つである。在家、ヒンズー教徒も同趣旨の儀礼を行う。出家儀礼には四つの段階がある。① 準備式(三日前)、② 出家式…僧侶カーストの少年は奇数年齢時(三・五・七・九歳等)に、五名の僧侶の下、得度式を行う。剃髪し、出家の儀礼を受け、僧衣に着替える。受戒し、比丘名を受ける。③ 受戒式…出家の生活を四日間続ける。④ 還俗式…僧衣を脱いで在家者に戻る。在家戒律を守る事を誓い、大乘菩薩の道を歩む事を決意する。彼らは秘密のマントラ等も教えられ、在家↓小乗↓大乘↓金剛乗の各段階を体験する。

出家儀礼の受戒者は成人と認められ、父親所属寺院の、正式メンバーに登録される²⁾。

4 灌頂儀礼

アーチャリヤ(阿闍梨、密教僧の尊称)になる事。徹底した秘密主義が関係者間に存在しており、未詳であるが、以下のような五種の灌頂からなるといわれる。① 水瓶、② 冠、③ 金剛杵、④ 鈴、⑤ 秘密、智慧の各灌頂³⁾である。

5 通過儀礼

基本的な通過儀礼は「一〇の通過儀礼」と呼ばれるが、「一〇の通過儀礼」とは、

- ① 懐胎式…女子の生理の始まりを祝い、一二日間の独居を行う。② 懐妊式…妊娠四〜六ヶ月の女子が男子出生を祈願する。③ 健康祈願式…懐妊女性の頭髪を整える。④ 誕生式。⑤ 命名式…誕生後一ヶ月以内に行う。⑥ お食い初め…果物、穀物を食べさせる儀礼。⑦ 出家式。⑧ 受戒式。⑨ 還俗式。⑩ 結婚式…神との結婚と実際の結婚がある。神との結婚では、六〜一二歳の女子がミカン科果実(ペル)(ヒンズー教では、ヴィシユヌ・ナーラーキヤナの象徴と言われる)と儀礼的な結婚をする。これによって彼女はたとえ夫が先に他界しても、寡婦となる事がないといわれる。これらは何れも、仏教徒の生涯の節目に行われるものである。いずれも仏塔・仏陀への供養や護摩から成り立っている⁽¹⁾。①、②、③または⑩の神との結婚は、女性の儀礼であり、⑦、⑧、⑨は男性のみが受ける。

6 日常儀礼

寺院では「日常供養」と呼ばれる。例えば、カトマンズ市では、仏教寺院ジヤナ・バハで、僧は口漱ぎを行い、身体を洗い、本尊である白観音(セト(白の意味)マチェンドラナート)像を線香、称名の吟唱、花等で供養する。本尊の供養の後境内にある仏塔、阿弥陀仏、文殊菩薩等の尊像に花などを捧げ、日常供養は終わる。同寺院では、毎月の定期儀礼がある。毎月上弦第八日(太陰曆)に観音に対する「第八日の請願儀礼」が行われる。別の寺院では、上弦第三日に請願儀礼を行なう。

任意に行われる儀式は、長寿、健康等を願って信者が僧に依頼して行っている。祭主の依頼に応じて「七種無上供養」が行われる。是は、① 礼拝② 供養③ 懺悔④ 随喜⑤ 勧請⑥ 懇請⑦ 回向のプロセスによる供養で

ある。儀礼場には多くの燈明が置かれ、一〜五人の僧侶が長時間にて大規模に行う。¹⁵⁾

年中儀礼の内でも最も盛大な一つが仏陀生誕日 (Buddhajayanti) である。太陰暦で行われるので、毎年実施日は変わる。生誕日の一〇日程前に、パタン市では、赤色の観自在ラト (赤の意味) マチェンドラナートが山車 (祇園祭の山鉾の源流といわれる) に乗せられ、本来の住処であるカトマンズ南部のブンガマテイ村に遷座され、「ラタ・ジャトラ」が行われる。暦はヴィクラム (Bikram Sambat : B・S) が公用暦でヴィクラマーデイトヤ王が紀元前五八八年に定めた太陰暦の一種であり、他にシャカ暦があり、一人のシャカ (Shaka) 族の王によって七八年に定められたものである。一年は一二か月に分けられ、各月は新月 (朔日) から満月に至る二週間 (上弦) と一六 (既望) から新月に至る二週間 (下弦) に分けられる。

最も重要な期間が「ゲンラー・ダルマ」と呼ばれる約一ヶ月間である。ヴィクラム暦 (ネパールの公用暦四月一三日〜翌年四月二二日) が一年間、太陰暦) のシュラバン (七月一六日〜八月二六日) の上弦第一日からバドラ (八月一七日〜九月一六日) の下弦最終日までが相当する。雨季であり、ゲンラー・ダルマ間の宗教行事には、初期仏教教団の雨ごいの活動が反映しているといわれる。寺院では般若経典の読誦、聖文殊真実名義経の読経をしつつ供養を、スワヤンブナート寺院では、夜明け前から信者家族が訪れ、仏塔・仏像に供養し、仏塔を右回りに回る右繞 (みぎのり) を行う。またある寺院では、過去七仏の一人・燃燈仏の来訪伝説を踏まえ、「五種の進物」の儀礼を夫々行なう。ゲンラー・ダルマの二日前に「ガターン・ムガ」儀礼がおこなわれ、当日に最も基本的な三つの供養、「師曼荼羅供養」・「三三昧」・「バリ供養」からなる「五つの器に盛られたバリ供物を捧げる供養」が行われる。¹⁶⁾

三つの供養の内、「バリ供養」とは、古来インドにおいては、「バリ (Bali)」と呼ばれる供物を捧げる行為が行われてきた。現代のネパール仏教においても、死霊・悪鬼等の霊的存在、不吉な存在とみなされる対象にバリが行われる。

供養が、供物を捧げ相手をもてなす行為であるのに対して、バリはそのままでは自分に危害を加えるかもしれない危険な相手を慰撫する目的で捧げられる。スヤンプーナート寺院では、器に飯や葉、肉等を盛ったバリ供物がハーリーテイ女神 (Hariti) (鬼子母神) に捧げられる。又、特定の目的でバリ供養が行われる。ヴァジラチャリヤとシヤキヤの人々は七七歳、八〇歳、九〇歳の誕生日に祝いの儀礼を行なうが、その際デーシヤ・バリと呼ばれる、米を入れた巨大な器を用意し、神々の眷属、諸霊に捧げる目的で、町を練り歩きながら器の米を人々に撒いていく。⁽¹⁷⁾

六 ネパール仏教とチベット仏教の関連

1 歴史的関連

ネパールの仏教は、釈迦伝道の地・インドで一二〇三年にヴィクラマシーラ大寺院炎上と共に仏教が減んだ後も、チベットとの交流により生き残る道を見出した。チベットからは、多くの巡礼者が盆地の仏教霊場を訪れたばかりでなく、仏教経典そのものやサンスクリット語を学ぶ留学僧或いは仏教美術を学ぶ画工や鍍金工の数も多かった。一方、ネパールの職人にとって、チベット仏教徒は最大の顧客であり、遥かなヒマラヤを越えて遠隔地に出稼ぎに行く者もあった。このような両国間の協力関係は、一九五九年のチベット動乱と一九六五年の文化大革命によってチベット仏教が壊滅的打撃を受ける迄、八〇〇年に及ぶ関係が続いたのである。六四六年に中国の僧侶三蔵法師玄奘が著した『大唐西域記』に、「学芸としてはなく、工芸の技がある」とネパールについて記した事も理解できる。⁽¹⁸⁾

盆地の東北郊外のボードナートには、世界最大の規模を誇る有名な大仏塔(後記)は、昔からチベット自治区首都ラサヤチベット仏教と結び付けられてきた。ボードナートは、ラサヤからサンケーを通る主要な交易ルートの一つで、チベット人の商人が盆地に入る場所に位置している。商人がヒマラヤを通って来た旅の成功に感謝の祈りを捧

げ、無事に帰還する事を祈った。今でも、ヒマラヤを旅する人々はボードナートの大仏塔に祈願している。

一九五九年のチベット動乱以後、チベットからネパールに逃れ、現在国内に居住する亡命チベット人総数は一〇万人強といわれ、既に三世代にも及んでいる。国勢調査統計から推計して、ネワールを母語としない仏教徒を配慮すれば、居住チベット仏教徒は四〇万人強とも推定されている。

2 現状

伝統的な職業として、カトマンズのウダスはチベット交易に従事し、チベット人との混血も増加し、チベット仏教への理解を深めている。具体的には、チベット寺院への寄進、教法の修行、チベット人への寄付等があげられる。パタンには、チベット仏教を修行するネワール僧侶へのグンバ (Gomba・チベット語で寺院) と称する礼拝堂が設置されている。ネワール内のチベット仏教にはニンマ派とカルマ・カギュー派がある。現在でもパタンでは、ニンマ派の埋蔵教法「普賢ラマの口伝」(クンサンラメー・シェルルン) が実修され、カルマ・カギュー派の歴代の祖師はネパールに関係が深くいくつかの教法が共通するものがある事も、ネワールに同派が浸透したと推測される。

ネパール国内に居住する民族の居住地は東部から極西部に及んでおり、主要な民族としては、東部山岳地帯のシエルパ (Sherpa)、中部・中西部の丘陵地帯のタマン (Tamang) 西部山岳地帯のタカリ (Thakali)、ロハ (Lohar)、ボテ (Bote) 等である。

シエルパ族は、ヒマラヤ登山のポーターとして有名であり、東部山岳地帯に居住し、人口一萬二千人(〇・四三%)で、最大の寺院はニンマ派のタンボチェ寺 (Tengche Monastery) である。盆地内でのシエルパはボードナート寺院周辺に多く居住する。その事由は、ボードナートを管理したニンマ派の活仏がヨルモワ (ソルクンプのラマ) であったことによる。タマン族は、カトマンズ北方山岳地帯に居住し、多くはラマ (Tama) と称す。人口は

一三五万三千人（五・二一％）でチベット系民族の最大人口で、信仰はニンマ派である。

タカリ族⁽²⁾は、チベット交易「塩の道」に従事し、屈指の富裕層になった。なお、ジヨムソン (Jomson) には、ニンマ派開祖パドマサンバヴァ (Padmasambhava: 七一七〇七七五) が五種類の聖遺物を納めたといわれる霊場 (クツアプテルガ: 身代わりの五種埋蔵宝: Kutsaptemga Monastery) がある。人口は二二万二千人 (〇・二％) である。

3 亡命チベット人の仏教について

一九五九年のチベット動乱以後、亡命チベット人の仏教徒 (僧侶、在家含む) は、盆地内のボードナート (Boudhnath)、スヤンブーナート (Swaymbhunath) 両寺院周辺に居住する。国内の入植地として、ソルクンプ、ポカラ、バグルン等であり、各々寺院が設置され、宗派は、四大宗派全てが寺院を設置している。

スヤンブーナートでは、一九五四年カルマ・カギュー派・カルマラージャ寺 (Karma Raj Mahavihara Monastery) が、仏塔の北側に創建され、当時は、チベット動乱以前であり、周恩来首相 (当時)、ラジendra・ブラサド (Dr. Rajendra Prasad: インド大統領・当時) も建設費を寄進した。ゲルグ派は、一九五一年ネワール人 G・シンが仏塔の裏手にマイトリ・ゴンパを創建した。チベット動乱後は、総本山ガンテン寺から亡命したセルコン・リンポシエ、ルブム・リンポチェが相次ぎ住職に付き、規模拡大に努め、砂曼荼羅の伝統があり、世界各国でイベント時に製作、拡大をしている。

ボードナート周辺は、ニンマ派・カギュー派・サキヤ派・ゲルク派の各派寺院が数寺ある。主な寺院は、ニンマ派元管長ティルポ・キエンツェ (Dilpo Khyentse Rinpoche: 一九一〇～一九九一) が創建したブータン寺 (通称。建設費はブータン王室からの寄進による) や、日本人も学ぶニンマ派カニン・シエードツプ・リン寺 (Karying Shedrup Ling Monastery: 一九七六創建) 等である。郊外のコパンには尼寺 (カチュー・ギャキル) も併設される。

霊場として、パドマサンバヴァが金剛薩埵とプルバを修行したといわれるヤンレシオの洞窟、釈迦の捨身施虎の遺跡といわれるナモーブツダ (Nambudtha) 等が著名である。ルンビニーでは、ムスタン王の後援によりチベットの寺を建立している。

七 テーラヴァーダ仏教（上座仏教）について

1 概要

ネパールのテーラヴァーダ仏教は、他のアジア諸国の仏教改革運動に見られたような西欧列強支配に対抗するためのナシヨナリズム形成、といわれる側面は認められない。国内的に問題となるのは、ヒンズー教対マイナーな仏教とか、元々存在していたネパール仏教対新興の上座仏教という対抗図が存在し、ネパール上座仏教の特色を形成している。その活動起源は一九三〇年代に始まり、一九四三年に初のテーラヴァーダ寺院がスワヤンブナートの一角にアーナンダクティ・ヴィハータ僧院が建立され、同院は現在も活動の中心である。一九五一年の王政復古後、国内活動が認められ、一九八〇年迄に、僧院三一、尼僧院一五が位置し、各々には、六〇名余の僧侶・尼僧が活動する。その儀礼の特徴は、説法に積極的であり、学問への洞察も深い。また、カーストからは自由な態度をとる。その姿は日常活動において常時僧衣を着用、剃髪をし、厳格な戒律を厳守している。文書による布教を主に行う。ネパール語よりもネパール語を重視し、出版物も多い。信者の出身カーストとしてはシャキヤが多い。

2 カーストから見た出自

テーラヴァーダの僧にはシャキヤ出身が多い。僧侶出身カーストの六〇名余の僧と尼僧では、僧三八%、尼僧四三%がシャキヤであり、ヴァジラチャリヤ出身は共に七%にすぎない。僧は伝統的なネパール仏教を公然と論破

しないように気配りしている。それは、自らの度量の広さを示すかのように行動すると共に、在家仏教徒支持者がネパール仏教の儀礼や行事を棄てきれずにいる事にもよる。ヴァジラチャリヤもテラヴァーダ仏教を内心では好ましくないと思っていないが、公然と論破しないように気配りしている。

3 在家仏教徒との関係

在家信仰者にとって、ネワール仏教、テラヴァーダ仏教のいずれかを選択し支援する向きは少ないと見られる。逆に、両者に自由参加して、自身の現実的願望の成就、将来の自身の安寧・幸福への功德の蓄積に務めるのが主であると思受けられる。現実には、在家信徒がネワール仏教の寺院へ向かう折、その途中にテラヴァーダ仏教の寺院が位置する事があり参拝順序として、先ずテラヴァーダ仏教の寺院に参拝し、そしてネワール仏教の寺院へ向かう事ある。在家信徒の動向に対応し、テラヴァーダ仏教の中にも儀礼的な要素復活への傾向もある⁽²²⁾。

八 三大主要寺院の概要

① ボードナート (Boudhanath) ネワール名 カスティ・チャイトヤ (Khasi chaitya)

ボードナートは、国内及び世界最大の仏塔 (Stupa) といわれ、盆地の東方に位置し、チベット仏教のセンターとしても深い歴史のある位置にあり、一四世紀建立といわれる。

古来、チベット、ブータン、シッキム、モンゴル、インド・ヒマラヤ地域とも大いに関係深く、毎年これらの地域からの巡礼者が参拝する。一九五九年のチベット動乱以降、国内チベット難民の居住地となってそれ以前の状態から変化し、域内周辺は、新たな寺院が建立され、タマン族の居住地に変化している。一八九九年初めて日本僧侶としてチベットに入国した河口慧海師が寄宿した場所でもあり、現在その記念碑が正面に建立されている。周囲に

マニ車が並び、人々は経文を唱え参拝している。

二〇一五年四月二五日の大地震で全壊に近い被害に見舞われたが、政府考古局の指導と地元仏教会及び地域仏教徒から成る復興委員会への寄進・奉仕や、民間の人的協力で二〇一六年一月一六日、僅か一年半余で完全復旧され、昨年一月訪問時には元通りの姿になり、地震の痕跡は見られない。

② スヤンブーナート (Swanyabnath)

スヤンブーナートは、仏教徒と共にヒンズー教徒の巡礼地でもある。国内最大のMahayana仏教の建立物であり、その由来と縁起は仏典「Swayambhu purana」に由り、ネパール開闢の伝説とされる。古代リッチャヴィ朝初代王ブルサデヴァ以前(四〇〇年以前)に建立され、一三四六年インド・ベンガルのスルタンであるシャムスッディーンが盆地に侵攻し、同仏塔を徹底的に破壊した後、現在迄度々修復されている。一四世紀にマツラ王朝時代に大々的に改修され、上部の裝飾塔が増築された。修理・改築は数度にわたり、一三七一、一三八一、一六二〇、一六五四、一九四五年に行われた。四面に真鍮製の禪定仏を祀るのが特徴的である。目玉寺といわれる仏塔の高さは一五m、周囲にマニ車が並び、人々は経文を唱え参拝している。

③ ナモ・ブッダ (Namo Buddha)

盆地外のカブレバンチョーク(カトマンズから車で片道二時間半余、四五km余)に建立されているチベット仏教スタイルの寺院で、地元住民には捨身飼虎の伝説の地²³⁾として知られているが、観光地から離れている。境内は立入禁止地域、写真撮影禁止が多く、詳細な巡回には許可を必要とする。昨年一月訪問時に、ネパール仏教会からの推薦を得て、寺院広報担当僧の案内で境内を一巡し、全ての施設を見学した。初めて過去七仏全てを見て、その金銅座像(全長約一〇m強、釈迦牟尼仏は約一二m弱)と各仏像の大きさと荘厳さに圧倒された。東大寺・毘盧遮那

仏に次ぐ規模と思われる。釈尊像と最初の五弟子像、八仏塔（釈尊前生の姿であるパノウティの王子の遺骨が納骨）等を見た⁽²⁴⁾釈尊像と最初の五弟子像、八仏塔。七仏金銅座像は、国内では本寺院のみ見られる。

過去七仏とは、釈迦以前にこの世に現われたとされる毘婆尸仏（Vipashuvi Buddha）、尸棄仏（Sika Buddha）、毘舍浮仏（Vishvabitu Buddha）、拘留孫仏（Krakuchchanda Buddha）、拘那含牟尼仏（Kanakamuni Buddha）、迦葉仏（Kashyapa Buddha）の六人の仏に釈迦牟尼仏を合わせていう⁽²⁵⁾。このうち前の三仏を過去莊嚴劫の三仏といい、あとの四仏を現在賢劫の四仏という。中世インドの時代には、殆ど全インドにわたって過去四仏または過去三仏の信仰が盛んに行なわれていた事が知られる。それは古くから六仏の信仰が説かれ、釈尊がサーリブッタに、前三仏は梵行久住せず、後三仏は梵行久住せりと、その因縁を説いたのと関係があると思われる。『法顕伝』には「拘留薩羅國」の条で、当時デーヴァダッタの伝統を継承して存在した仏教教団では釈尊を礼拝しないという注目すべき事実を伝えている⁽²⁶⁾。原始仏典では釈尊を牟尼（muni）と単称でよぶ場合がしばしばある⁽²⁸⁾。

九 カピラヴァストウ（Kapilvastu）

仏陀が活動していた当時の釈迦族の居住地である、カピラヴァストウの位置は現状まで未確定である。二説あり、先ず、ネパール側のティラウラコット（ルンビニーより西方二七km、Taurakot）とルンビニーより西南一四kmのインド領内のピプラハラ（Piprahawa、一八九八発掘）の遺跡が有力とされている。前者のティラウラコットの発掘は一八九九年インド人考古学者P・C・ムケルジーニにより、一部が発掘され、報告書が出版された事があった。一九六七年一〇月二〇日に発掘の鉋入れを開始し、一九六七〜七七年迄ネパール王国（当時）政府考古局と立正大学・ネパール考古学調査団の協力による八次に及ぶ発掘が実施され、調査の結果、遺跡は東西約四五〇m、南

北約五〇〇mの南北に主軸を持つ長方形の城塞遺跡である事、四つ以上の門、八つ以上の遺丘、二つの池をもつ事、遺構がマウリア朝（上限六〇年）からクシヤーナ王朝（上限三二〇年）にかけて存在した事が明らかになった。立正大学所蔵のティラウラコット出土資料はネパール王国政府から寄贈されたが、その後考古局保管中の資料は一九七五年の政庁（Sigha Durbar）火災時に殆ど焼失した。

後者のピプラハラは、一八九七年ペツペにより舍利容器が発見された。その銘文によれば、納入品は「仏陀」又は「仏陀の親族釈迦族」の舍利である。インド考古局は一九七一〜七四年の再発掘により「カピラヴァストウ」銘のシールを発見したが、遺跡は城址ではなく寺院遺跡であった。

その後インドはピプラハラこそカピラヴァストウであり、従来のティラウラコット説は誤りであると主張している。ネパール側はティラウラコットこそカピラヴァストウの遺跡であり、ピプラハラは、落城の後、生き残ったシヤカ族が仏陀の舍利を奉安した場所であると主張している。歴史的には、中世前期カサ王国、リプ・マツラ王（Ripu Malla、一三二二〜一三二四に治世）により、ルンビニー、カピラヴァストウはネパールに編入された地域である。カピラヴァストウの政治的帰属は、仏教学上からは重要問題でないが、仏陀の生誕地を領有する事が、ネパールの仏教徒に最高の位置付けと共に、シヤキヤが、シヤキヤ族の末裔であるとの原点であり、重要な問題点である。二〇一〇年以降、ユネスコと政府間協力で、現在域内全域の発掘調査が継続中である。

十 仏教から見たネパールと日本の交流の変遷

1 河口慧海師（一八六六〜一九四五）

同師は、一八九九年一月〜一九〇二年五月、初めての日本人僧侶として、ネパール・カトマンズ、チベット族の

村から徒歩で山脈を越えカイラス經由でチベット首都ラサに渡来した。滞在三年間、チベット僧として、セラ寺の大学に合格、修学僧として全力でチベット仏教の勉学や經典の収集に努め、ダライ・ラマ一三世に拝謁した。その後、正体が露顕しそうになって急遽脱出したが、ダーズリンでチベットの恩人が投獄されたと聞き、一九〇三年二回目のカトマンズ入りを果たし、歴代ラナ將軍の首相中、随一の名君チャンドラ・シヤムシエール・ラナ首相（マハラジャ、以下、チャンドラ）と会見した。チャンドラは、同師の恩人の誠心誠意の助命嘆願文に感歎し、仲介者として、ダライ・ラマ十三世への助命奏上文送付の許可を与え、同時に多数の經文・仏像を下賜した。チャンドラは、日本の漢訳『大藏經』とネパールのサンスクリット仏典の交換を提案したため、河口氏は帰国後一九〇五年二―二月三度目のカトマンズ入りの折、チャンドラに黄檗版『大藏經』を贈呈した。チャンドラは、国内のサンスクリット版『一切藏經』を贈り、河口師は、梵語研究と梵文經典の収集に努めた。同師が収集した「河口コレクション」は現在東北大学図書館に所蔵されている。同師によるチベットとの初の接触は、このように密入国からであったが、それは同時に世にも格調の高い両国民間の交流をもつて始まった。同師の不朽の名著『西藏旅行記』上下二巻は英訳、『Three Years in TIBET』1919として出版され、後に改訂され、現在の梵語研究と梵文經典の収集及び『チベット旅行記』全五巻となり、日本人による最初の貴重な文献として、一部はタカリ族の学校の教科書に使用されている。一九一四―一五年、第二回のチベット入りをした。チベット側は全面歓迎したが、英領インドは極力阻止しようとした。（同師著『第二回チベット旅行記』²⁹）

2 大谷光瑞（浄土真宗本願寺派門主）探検隊関連

青木文教は、北インドに探検隊の一員として仏跡巡拝をし、大谷光瑞門主の命により、一九一二年九月八日ダーズリン国境からネパールに入国した。東ネパール仏跡を踏査したが、高山病のため九月二二日国境を越え、チベッ

ト入りを多田等観師（ブータン経由）と共にしたと同氏著『西藏遊記』（一九二〇、内外出版）に記載がある。清水黙爾も一員として門主の命により一九〇二年ネパール入り仏跡調査をしたが、詳細な記録は残っていない。⁽³⁰⁾

3 河口慧海・高楠順次郎・長谷部隆諦・溪道元・増田慈良（全員、仏教学・梵語学の権威）

一九一二年一二月、五名は揃ってルンビニーを参拝し、サンスクリット語仏典、ルンビニー・カピラヴァストゥを調査し、梵語研究をした。一九一三年一月～二月、河口慧海・高楠順次郎・長谷部隆諦は、チャンドラに謁見し、三名が収集した五七〇点のサンスクリット写本は一九一五年に東京大学に寄贈され、その後のわが国の仏教研究に大きく寄与した。河口慧海師は、チャンドラにルンビニーの重要性を提起している。河口のみは名医としてチベットで聞こえた噂が崇つて、人々の診療にも追われた。同師のカトマンズ行きは、計五度目であった。⁽³¹⁾

その後約二〇年間、ネパールは深く関係を閉ざし、日本人の視界から遠ざかり、日英の敵対関係へと転じていった。その原因は、一九〇二年の日英同盟が、その後しばらく日本人のインド・ネパールに繁くなつた一因かもしれないが、日英の関係がその後次第に悪化し、やがて敵対関係へと転じていったからである。あるいは、明治時代の生きて脈打つ旺盛な仏教が、大正・昭和へと衰えていったかもしれない。関係の復活は一九五一年王制復古をまたざるをえなかった。⁽³²⁾

4 戦後…金子良太氏（東洋文庫）、氏家寛勝（高野山大学）

一九五五～五七年にかけて滞在し、ネパール仏教を調査した。カトマンズ市内国立ビル図書館のサンスクリット本の図録を収集し、調査報告論文を残している。（Buddhist manuscripts of the Bir Library, 『大正大学紀要』No.40、1965）また氏家氏は、一九七〇～七八年にかけて滞在し、ネパール仏教を調査・研究し、その際の収集品は高野山大学に所蔵にされている。⁽³³⁾

十一 まとめ

ネパールは中国とインドの緩衝国であるが独立国であり、宗教的色彩が濃い。インド・アリア文化を形成するヒンズー教と仏教とに育まれる国である。一九七〇年代以降、国内はあらゆる面で変化した。総人口は二・三倍になり、首都カトマンズを中心とする盆地では、二・八倍に増加した。盆地は、歴史的に経済と文化の中心であった。ヒンズー教と仏教の寺院数は五〇年間ほぼ変わらず八百余に及ぶ。古代から居住するネワール族が盆地と共に国内の主導的役割を果たし続け、王制以降の支配者はヒンズー教徒であり、その勢力は強いが、文化的には主導的立場は固守している。人口百三二万人、その内、三%が仏教徒としての自覚を持つといわれ、インドから伝来した大乘仏教の伝統は生きている。チベット・ビルマ語系であるが、名前・儀礼書はサンスクリットを使う。七世紀から今日に至るまで密教の伝統が続き、自らの密教を金剛乗と呼ぶ。彼等は、伝統的に、祖先崇拜を主に、種々の儀礼を重要視、執行し、各家には仏塔を作り儀礼の折は重要な役割を果たす。ヴァジラチャリヤとシャキヤの上位僧侶カースト、特に青年の間では、僧侶や尼僧になる者が多く見られる。このような背景には、ネワール仏教は、盆地内に限定され、近年の急速な衰退への仏陀より伝来の「出家主義」の本来の仏教に帰ろうとする考えが見られる。

チベット仏教は、今日、殆どの宗派の寺院がボードナートを始め盆地内に百余の僧院が建立され、活発な活動を行い、巡礼地でもある。その交流は盆地からラサ迄約一二日間と近い距離であり、国境越えの道路もある。殆どの人々は輪廻の存在を強固に信じている。近年、シャキヤを主にテラヴァーダ仏教も僧院による活動も活発である。二〇〇八年の王制廃止、共和制以降、ネワール仏教には、コミュニティ勢力の増大が大きな問題となっている。又、二〇一五年四月二五日の八一年ぶりの大地震が、ネパールの宗教文化全般に如何なる影響を与えるかは未知である

が、今後大きな変化を余儀なくされるのは必至と思われる。

注

- (1) 川喜田二郎編『ヒマラヤ』朝日新聞社、一九七七、三二一～三三二頁参照。
- (2) 宮坂宥勝『仏教の起源』山喜房佛書林、一九七八、六六～六八頁参照。
- (3) 宮坂、前掲書、六四～六五頁参照。
- (4) 川喜田、前掲書、七四～八〇頁参照。
- (5) 佐藤正彦著『ヒマラヤの寺院―ネパール・北インド・中国の宗教建築―』鹿島出版会、二〇一二、二二～二三頁参照。
- (6) 西澤憲一郎著『ネパールの歴史―対インド関係を中心に―』勁草書房、一九八五、一六五～一六七頁参照。
- (7) Cf. Bista, D.B. *People of Nepal*. Ratna Pustak Bhandar. 1989 pp.17-34.
- (8) 日本ネパール協会編『ネパールを知るための六〇章』明石書店、二〇〇〇、二五四頁参照。
- (9) 田中公明・吉崎和美著『ネパール仏教』春秋社、一九九八、一九七頁参照。
- (10) 山口しのぶ『ネパール密教儀礼の研究』山喜房佛書林、二〇〇六、八～一〇頁参照。
- (11) 田中・吉崎、前掲書、一七五頁参照。
- (12) 田中・吉崎、前掲書、一八五～一八六頁参照。
- (13) 田中・吉崎、前掲書、一八七頁参照。
- (14) 山口、前掲書、一六頁参照。
- (15) 山口、前掲書、一七～一八頁参照。
- (16) 立川武蔵著『ヒンドゥーの歴史』山川出版社、二〇〇五、三八〇～三八一頁参照。
- (17) 山口、前掲書、六～一〇頁参照。
- (18) 佐藤、前掲書、二二頁参照。
- (19) Cf. Bista, op.cit., pp.67-87.
- (20) Cf. Bista, op.cit., pp.55-61.
- (21) Cf. Bista, op.cit., pp.97-106.
- (22) 田中・吉崎、前掲書、二五七～二四〇頁参照。

- (23) 田中・吉崎 前掲書、七五頁参照。
- (24) Cf. Khenpo Losel *NAMO BUDDHA*. Thempo, 2008, pp.10-11.
- (25) Cf. Karki, B. *The Great Bouddha Stupa Gov. of Nepal*. Shree Boudhanath Area Development Committee, 2016, pp.7-8.
- (26) 中村元著『佛教語大事典』上、東京書籍、一九七五、一五五頁参照。
- (27) 宮坂、前掲書、二九四～二九五頁参照。
- (28) 宮坂、前掲書、二九八～三〇五頁参照。
- (29) 日高信六郎・川喜田二郎編『ネパール・ヒマラヤ探検記録 ネパールと日本 一八九九―一九六六』講談社、一九六七、六六～八〇頁参照。
- (30) 日高・川喜田、前掲書、八一～八四頁参照。
- (31) 日高・川喜田、前掲書、八四頁参照。
- (32) 日高・川喜田、前掲書、八四～八五頁参照。
- (33) 日高・川喜田、前掲書、業績記録、二～三頁参照。

参考文献（注で言及しなかった文献）

- Bidari, B. *Kapilvastu—The World of Siddhartha*— Hill Side Pressgn, 2004.
- Gov. of Nepal. *National Population and Housing Census of Nepal*, 2011.
- Hagen, T. *Nepal—The Kingdom in the Himalayas*, 1980, Kimmery & Frey.
- ISRC : *Demographic Profile of Nepal*, Mega Publication, 2013/2014.
- Losel, K. *NAMO BUDDHA*, Thran, 2008.
- Singh H.I. *Nepal in Records*, Educational Publishing House, 2007.
- Wright, D. *History of Nepal*, 1877, 1972 (Reprint) NABP.
- 石井溥編『ネパール』河出書房新社、一九九七。
- 石井溥編『もっと知りたいネパール』弘文堂、一九八七。
- 貞兼綾子監修『チベット政治史』亜細亜大学、一九九二。

別表一 国勢調査に見る仏教徒・ネワールの変遷

①人口の変遷

対象年	総人口	仏教	ネワール
1961	9,413	871	—
1971	11,560	867	—
1981	15,023	799	—
1991	18,491	1,439	1,041
2001	22,737	2,443	1,245
2011	26,495	2,396	1,322

②比率

対象年	仏教	ネワール
1961	9.25%	—
1971	7.50%	—
1981	5.32%	—
1991	7.78%	5.63%
2001	10.74%	5.48%
2011	9.04%	3.20%

③対前対象年比（10年比）

対象年	総人口	仏教	ネワール
1961	11.11%	—	—
1971	22.81%	-4.59%	—
1981	29.96%	-784%	—
1991	23.08%	80.10%	—
2001	22.96%	69.77%	22.78%
2011	16.53%	-1.93%	6.18%

出所：CBS: Statistical Book 1972, 1982, 1992, 2002, 2012より作成

別表二 宗教別・地域別人口分布（2011年国勢調査）

①人口

（単位：千人）

	東 部	中 部	中西部	西 部	極西部	合 計
ヒンズー教	4,145	7,426	3,278	4,221	2,482	21,552
仏教	458	1,409	99	403	27	2,396
イスラム教	267	556	113	220	6	1,162
キリスト教	79	165	50	54	28	376
その他	863	101	7	29	9	1,009
合計	5,812	9,657	3,547	4,927	2,552	26,495

出所：CBS: National Population and Houding Census 2011

②比率

（単位：％）

	東 部	中 部	中西部	西 部	極西部	合 計
ヒンズー教	71.32%	76.90%	92.42%	85.67%	97.26%	81.34%
仏教	7.88%	14.59%	2.79%	8.18%	1.06%	9.04%
イスラム教	4.59%	5.76%	3.19%	4.47%	0.24%	4.39%
キリスト教	1.36%	1.71%	1.41%	1.10%	1.10%	1.42%
その他	14.85%	1.05%	0.20%	0.59%	0.35%	3.81%
合計	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%	100.00%

出所：CBS: National Population and Houding Census 2011

③性別・地域別（ヒンズー教 仏教）

（単位：千人）

	東 部	中 部	中西部	西 部	極西部	合 計
ヒンズー教	4,145	7,426	3,278	4,221	2,482	21,552
男	2,003	3,746	1,576	1,963	1,183	10,471
女	2,142	3,680	1,702	2,258	1,299	11,080
仏教	458	1,409	99	403	27	2,396
男	214	683	47	182	13	1,140
女	244	726	52	221	14	1,256

出所：CBS: National Population and Houding Census 2011

別表三 ネワール族関連

①人口・母語

(単位：千人 %)

	東 部	中 部	中西部	西 部	極西部	合 計
人口	5,812	9,657	3,547	4,927	2,552	26,495
ネワール	175	970	23	147	7	1,322
地域別比	3.01%	10.04%	0.65%	2.98%	0.27%	4.99%
(参考)ネワール男	83	476	11	68	4	642
女	92	494	12	79	3	680

出所：CBS: Statistical Year Book of Nepal 2015

②カトマンズ盆地内分布

(単位：千人 %)

	カトマンズ	パタン	バクタプール
総人口	1744	468	305
男	913	238	155
女	831	230	150
ネワール (族)	383	156	139
比率	21.96%	33.33%	45.57%
宗教			
ヒンズー教	80.01%	73.53%	87.85%
仏教	15.39%	19.27%	9.18%
イスラム教	1.25%	0.66%	0.48%
キリスト教	2.33%	5.02%	1.97%
その他	1.02%	1.52%	0.52%
計	100%	100%	100%

出所：Demographic Profile of Nepal 2013/2014

③カトマンズ盆地内男女構成

(単位：千人)

	カトマンズ		パタン		バクタプール	
	男	女	男	女	男	女
ネワール	190	193	77	79	69	70
比率	20.81%	23.23%	32.35%	34.35%	44.52%	46.67%
宗教						
ヒンズー教	735	661	177	168	136	131
仏教	135	134	45	45	14	13
イスラム教	15	7	2	1	1	1
キリスト教	19	21	11	12	3	3
その他	9	8	3	4	1	2
計	913	831	238	230	155	150

出所：Demographic Profile of Nepal 2013/2014

別表四 仏教系諸民族人口分布

①人口・母語

(単位：千人 %)

民族名	人口	総人口比	男	女	母語人口	総母語比
シェルパ	112	0.42%	54	58	115	0.43%
タマン	1,540	5.81%	745	795	1,353	5.11%
タカリ	426	1.61%	204	222	5	0.02%
ロパ	4	0.02%	2	2	3	0.01%
ボテ	10	0.04%	5	5	9	0.03%
グルン	523	1.97%	239	284	326	1.23%
マガル	1,888	7.13%	875	1,013	789	2.98%

②カトマンズ盆地内

(単位：千人 %)

民族名	カトマンズ		パタン		バクタプール	
	人口	総人口比	人口	総人口比	人口	総人口比
シェルパ	23.5	0.13%	1.0	0.21%	0.3	0.10%
タマン	192.3	11.03%	61.3	13.10%	27.2	8.93%
タカリ	21.8	1.25%	3.2	0.68%	1.3	0.43%
ロパ	0.0	0.00%	0.0	0.00%	0.0	0.00%
ボテ	1.8	0.10%	0.0	0.00%	0.0	0.00%
グルン	45.8	2.63%	6.0	1.28%	1.7	0.56%
マガル	70.1	4.02%	21.9	4.68%	6.8	2.23%
計	355.3	20.37%	93.4	19.95%	37.3	12.24%
総人口比	1,744.2		468.1		304.7	

出所：CBS: National Population and Housing Census 2011

別表五 ネパール仏教史年表

紀元前四八四頃	ブツダ、ルンビニーで誕生（最新の研究では紀元前四八四四年頃～四〇四年頃が最も信憑性が高いとされる。）
紀元前二四九	アシヨカ王、ルンビニー訪問、アシヨカ石柱建立
四〇三	中国僧玄奘、ルンビニー訪問
五九五頃	吐蕃のソンツェン・ガンポ王即位
七世紀前半	ネパール王女ティツンがソンツェン・ガンポの妃となる
六四三	王玄策ネパールを訪れ、ナレンドラデーヴァ王と会見
八八一	ネパール暦始まる
九二〇	ネパール暦を用いた現存最古の「八千頌般若経」貝葉写本
一一二九	スヤンブーナート仏塔現存最古の修理碑文
一二〇三	ヴァイクラマシーラ寺院炎上、インドの仏教滅亡
一三五〇頃	シヤムスツティーン・イリヤースのカトマンズ盆地侵攻
一三七二	スヤンブーナート仏塔、イスラム教徒による崩壊二三年後に、現在の規模に改築
一三八〇	ジャヤステイティ・マツラ王即位、仏教徒のカースト化
一三八二―九五	ジャヤステイティ・マツラ王治世時に盆地にイスラム教徒侵入
一四八四―一五二〇	ラトナ・マツラ王がカトマンズに自立、マツラ王朝分裂する
一四九七―一五〇四	ツァンニユン・ヘルカがスヤンブーナートの仏塔を修理
一五九四	シヴァシンハ・マツラがスヤンブーナートの仏塔修理
一六〇一	パタンのマハーブツダ寺院が完成
一六一八	パタンにシツティナラシンハ・マツラ王が自立
一六四二	チベットにダライ・ラマ政権成立
一六四一―一七四	プラタップ・マツラ治世時に、セト・マチェンドラナート祭開始
一七二三―二四	カルマ派第一二世黒帽ラマ、チャンチュブドルジェのネパール布教。ジャガジェヤ・マツラ王、タルケギヤン寺院建設に土地提供

- 一七九〇 カルマ派第一三世黒帽ラマ、ドゥートウルドルシェのネパール布教
- 一七五八 ドウクバ・タムチエーキユンバによるスヤンブーナートの修復完成
- 一七六九 プリシユビナラヤン・シャヤーがカトマンズ盆地を制服、全土統一。グルカ王朝（シャヤー王朝）の成立
- 一七九一―九二 チベット・ネパール戦争
- 一八二〇 B・H・ホジソンがネパールに入る（初代イギリス総領事）
- 一八二一 シヤブカル・ツォクドウクランドル、ボードナートに金銅のカンジルを奉獻
- 一八八二 ラジェンドララーラ・ミトラ、『ネパールのサンスクリット仏典』を刊行
- 一八九六 A・ヒューラーがルンビニーでアショカ王の石柱を発見
- 一八九九 河口慧海師がネパールに入る。英領インド政府、考古学者ムケリジーにルンビニー発掘調査を命ず
- 一九〇五 河口慧海師、チャンドラ・ラナ首相に面談
- 一九二三 「チベットの穢れ」事件発生
- 一九三三 ジャヤプリシユヴィ・シン、シカゴで開催の第三回世界仏教徒会議に出席。カイザー・ラナ將軍、ルンビニーを發掘調査、釈迦生誕時の沐浴の池を発見
- 一九四三 アナンダクティ・ビハラがスヤンブーナートでネパール初のテーラヴァータ寺院を開設
- 一九四四 ネパール仏教会ダルモダヤ・サバが設立
- 一九五一 ラナ政権崩壊、トリブヴァン国王による王政復古
- 一九五六 第四回世界仏教徒会議がカトマンズにて、ネパール仏教会ダルモダヤ・サバ主催で開催、マヘンドラ国王が開会の挨拶
- 一九五九 チベット動乱により多くのチベット人がネパールに亡命
- 一九六七 国連事務総長ウ・タント氏、ルンビニー訪問
- 一九七〇 国連ルンビニー開発委員会設立。同年丹下健三氏による丹下マスタープラン（一九七八設計図完成）にて復興
- 一九七二 ネパール、マハヤナ仏教会が設立
- 一九七九 ボードナート仏塔、世界文化遺産に指定

Cf. H. L. Singh: *Nepal in Records*, 2007, Educational Publishing House, pp.21-27.